
東方想讓心

ニコウミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方想讓心

【Nコード】

N6880Z

【作者名】

ニコウミ

【あらすじ】

多分、普通の一般人で有ろう鷹島和樹、通称カズは高校生と言う職業を終え「さあ、明日から自宅を護るぞ」と言う立場におかれていた

そんなクズ野郎にあるお仕事の紹介がきた

「ある家に住むだけの簡単な御仕事です」

「うさんくせEEEEEEEEEEEE」

そんな思いも笑い飛ばすかのように無理矢理契約してしまった和樹

のめのまえはまっくらになった

胡散臭いババア系美少女（笑）に言われるがまま着いていった先は
和樹にとって笑えない日常の始まりだった

突然修正を行う場合があります、そしてその修正で話が少し変わる可能性がございます、ご了承ください

プロローグ 修正済（前書き）

前書きと言つことで

作者は東方projectは一応プレイはしております

ただ二年前です（・・・）

この作品に最強やチートなどは敵のみに存在します

主人公は人にしたら少し強いくらいです

どのくらい強いかわねれば犬より強くて熊より弱いです

分かりづらい？

じゃあ子供より強くてボフサップより弱いです

つまりそう言つことです

東方projectの作品を書くのは初めてですが小説自体は初めてではないです

ではお楽しみください

修正しました

プロローグ 修正済

「笑えよ、ベジータ…」

雪がパラパラと降り続く真冬の夜、ある青年が茶色の封筒を片手に公園のベンチに佇んでいた

「誰がベジータよ」

その青年の隣には同じくらいの年の女性が寒そうに手を擦りながらジト目で青年を睨む

その女性は普通過ぎる青年とは真逆に周りより数倍もかけ離れた美貌、つまりはかなりの美人だ

綺麗な金髪にハーフ系の整った顔は幻想的な美しさを放っていた

「メリー、凄く驚くかも知れないんだが聞いてくれ…実は」

「落ちたんですね、分かります」

「……笑えよ、ベジータ」

「下等民族が…とでも言っただけなの？現実を見なさいよ」

メリーと呼ばれた女性は青年が持っていた書類を奪うとパラパラめくり始めた

そして徐に溜め息をついた後すぐ隣にあるゴミ箱に興味が無さそうに投げ捨てた

「ちょっと七つくらいボール探してくる、探さないで」

そんなメリーを見た青年はウンザリしたように右手で顔を覆い息を吐きながら呟いた

そう、この青年はただいま就活中で色々な会社の入社試験を受け回ったが

「ええ…最初は簡単に受かるなんて思い込んだ俺が馬鹿だった…
…30件も落ちるとさすがに希望が見えなくて命がマツハなただけ
ど…」

この青年、どこにも受からないのだから
しかも今日受けたこのクリスマススイブが記念すべき30件目なので
あるさ

まさにクルシミマスイブ

「ちなみにどんな会社受けたのよ？」

「刺身の上にタンポポを乗せる工場だ」

「……あれはタンポポじゃないわよ……」

「え？」

「て言うかそれ手作業じゃないわよ……」

「ええ………？」

もはやなにも言えなくなった青年、和樹はそのまま横に倒れメリーの太ももに倒れる、所謂膝枕をいきなり断りもなくした和樹に対してメリーは溜め息をついた

「ちよつと！断りもなく女性にこんなことして……流石の貴方も落ち込んでるの？」

「ああ…ごめん…ちよつとだけ人の温もりが欲しい…」

頂垂れるように和樹は呟く

メリーはそんな和樹を見てなにも言えず、殴ろうとして中に浮かせていた手を和樹の頭に優しく落とした

本来、和樹と言う男がこのように人に素直に甘えるのは幼馴染みであるメリーが見ても始めてに近い行動だった

そんな和樹に渴を入れるつもりだったメリーは言葉に詰まりながら頭を撫でた

「それで、どうするのガス？」

「さっぱりだ…どうしようもない…」

「そう、まあ来年一月までに仕事が決まらなかったら私が雇ってあげるわよ」

そうメリーは少し顔を赤くしながら言った、確かにお嬢様なメリーなら使用人として一人くらい雇えるかも知れないが、それは男として幼馴染みに雇われるとかなんか情けない思いが来てしまう

「いや…なんか男として情けないとかそんなレベルじゃなくて泣きそう…」

「プライドなんか犬にでも食わせなさい、そして私に膝まずいて忠誠を近いながら惨めに靴を舐めなさい、そしたら餌をあげるわ」

「お前に雇われた未来が想像出来るんだが、光が見えない」

「あら？私の使用人は明るい未来しかないわ」

そう言いながらメリーはクスクス笑った

そんなメリーに苦笑いをしながら幾分か気持ちが落ち着いてきた、メリーはいつもここのなのだ

なんだかんだ言いながらしつかりと救ってくれる幼馴染み、神様が端正込めて作った人のように出来た女性

「メリー」

顔を見るのは恥ずかしいのか和樹はそのままの体制で呟いた

「なに？」

耳が赤くなっている和樹に少し笑いながらメリーは優しく問い掛けた、そんなメリーの問いかけにこう言う場面に慣れていない和樹はさらに恥ずかしくなってくる

「そのだな……………」

「なによ？」

言いたいことは簡単なのだ

和樹と言う男は何時になってもメリーに助けられてばかりだと、それなのにろくに恩も返せない、なにもしてやれない、助けてやった記憶もあまりない、頼りっぱなしでまだまだメリーに甘えてる自分が少し嫌になつて来て、それでも甘えてしまう自分がいて

「なに？和樹らしくないわ、はつきり言いなさいよ」

自分が言うことを分かっている癖にニヤニヤ笑う幼馴染みにこんな弱い男が言えるのはありきたりな言葉しかない

「いつもありがとう…」

こんな事しか言えない馬鹿な男を気にかけてくれて、恥ずかしいからありがとうまでしか言えないけど

「あらあら、どういたしまして」

クスクス笑う幼馴染みの声を聞いてると嬉しくなる自分がいるんだ、恋心ではないし、友愛でもない、なんなのか分からないけど、今はお礼だけ、そしていつかこの助けて貰っている恩を

「…必ず返すから」

メリーに聞こえないように和樹は呟く、聞こえてるのか聞こえてないのか分からないが、メリーは和樹をまた撫でた

「……どっかい正一」

「あら？もういいの？今しか味わえないメリーさんの膝枕よ？」

「いきなり悪いな、もう大丈夫だと思う」

「……そう、じゃあ」

そう言つてメリーは携帯を和樹に見せる

画面には「クリスマス限定！ビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグ！いまなら三千円だ！お得ッウウ！」と言つ見出しに有り得ない形をしたハンバーグの写真

そしてヨダレが少し垂れた満面の笑みのメリーが不気味なオーラで和樹を見ている、否
睨んでいる

「奢りね」

「……………ええ？この空気ですつ言つこと言つちやう普通？」

「あら？麗しき女性の太ももを貸してあげたのよ？見あつた代償でしよ？」

ああそつだ、昔からメリーとは素晴らしい女性だつたなと和樹は呆れたように溜め息をついた

人間関係って必要だよね

修正済(前書き)

修正しました

人間関係って必要だよね 修正済

メリーにとんでもないハンバーグを奢らされたクルシミマスイブから二日後

俺は家でのんびりしている日々を過ごしております、就活はどうしたんだって？

「来年から本気出す…」

逃げてないよ、ただ来年から本気出すだけだから、うん、もう誰でもいいから雇ってくれないかな、なんて考えていると突然チャイムが鳴った

そう言えばメリーが来るみたいなこと言っていた、まだ昼の11時だがやけに速いな

「すみません！！新聞の勧誘なんですけど！！」

どうやらまったく違うようだ、また読○かな
断っても断っても次々とくるんだよね

「はいはい、ちょっと待ってください」

取り敢えず適当に断るかな、俺は玄関の前に立つと覗き穴からちょっと覗いてみた

「ついに文文。新聞現代デビューですよ……あのババアが授けたチャンスは逃してはいけませんよ…フヒヒ」

黒髪ショート、ふむ、E、いやDか？中々のレベルだ、しかも美人

じゃないか、やるな読〇

これは読〇を見直すべきだな…

まずはこの前会得した福山ボイスで印象をよくしよう、そしてあわよくば仲良くなりたい！

「ちよっ……ゲフンゲフン…御待たせしました」

「あやや…ダンディな声ですね、虫酸が走ります」

「え？」

「え？」

なんかいま初対面に対して有り得ない言葉が空耳したんだが、いや、気のせいだな
まさかこんな美人が

「ああすいません！つい本音が出てしまいました」

直球すぎワロタ

「すいません、お帰りください」

「お邪魔しますね」

「え？いや帰ってくれませんか？」

「あやや、狭い部屋ですね」

あれ？目の前に居たはずなのにいつの間にか炬燵に入ってミカン向き始めた、あれ？確かにいま目の前に居たはずなのに

「何してるんですか、さっさと入ってきてくれないと契約の話がで
きないじゃねーですか」

「いや帰れよ、て言うか契約なんかしねーよ」

「いまならビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグの割引
券拳げちゃいますよ？お得ツウウ！」

「いやだから帰れよ、なに？ワンダフルケーキ型ハンバーグ流行っ
てんの？どう見たってあれ他店舗に差をつけるために開発した新商
品だけど失敗しちゃってる形じゃねーか」

「さて契約の話ですけど」

「いやだから帰れよ」

「人の話は最後まで聞けって教わりませんでしたか？屑が」

聞き間違いじゃない、コイツ間違いなく契約取る気無いね、「いい
から契約しろヤツ！！」みたいなヤクザタイプだね

「あ、足は伸ばさないで下さいね、私が伸ばしますんで」

「喧嘩売ってる？」

「新聞売ってます」「ドヤア」

いや上手くねーよ、逆にイライラが増したわ

目の前の美人さんは思いつき足をのばして俺の足を蹴った、こっちを無表情で見ながらがつがつ足を蹴ったあと、やれやれと大袈裟にため息をついた

「もうちよい向こうに行ってくださいよ、足当たってます」

「分かった、喧嘩売ってるね、よし、表に出ろよ、血を見せてやる」

「あ、私は文と申します、名字は教えませんが、教えたくないんで」

「駄目だこいつ、早くなんとかしないと…」

そう言うと文は突然持っていた鞆から新聞らしき物を取りだし炬燵に無造作に投げつけた
コイツ契約させる気ねえだろ

「読○新聞？」

「違いますよ、文文。新聞です、漢字読めないんですか、ちなみに新聞を呼んだ感想はどうですか小学生さん」プスークスクス

「いま確実にイラッとした、うん、この思いだけは間違いないね」

「え？文文。新聞知らないんですか？」

「え？いやいや、知らないだろ、聞いたこと無いからな、いや自慢じゃないけど俺はネット灰人だしゲーム灰人でね、新聞なんか頼らなくても二次元の友達が教えてくれるから全然悲しくないもんねッ

「!!」

「いや、泣かれても困るんですが」

五月蠅い、なんだよ、二次元の友達舐めんなよ、金色の墮天使ルシフェル（ハンドルネーム）なんかお前親友だからな、ルシフェル君のお父さん総理大臣らしいからな

「ルシフェル君デイスツてんじゃねえぞ！」

「……あやや、勧誘する奴間違えましたね……」

+++++

一時間後

「ああ、うん、思い出したわ、文。ね、うん、有名だよ、知ってる知ってる」

「ですよ、ああビックリしました、まさか知らない人がいるんだあーなんて思っちゃいましたよ」

そうやって文はホツとしたように笑う、え？そんな有名な新聞なのか、いや、確かにここ一年くらいテレビ見てないし、ルシフェル君も最近チャットしてないけど……

これは俺だけクラスの話についていけなくてそこで会得した・シツ

タカブリ・を使うときがきたな

「実はこの家が家の新聞を契約してないことを知りまして編集長である私がここに来たんですよ」

編集長来ちゃったよ!? 契約してないマンションの一室に編集長来ちゃったよ!? う、嘘だろっ… そんなにこの新聞を契約しないのは常識から外れたことなのか… ここまで有名な新聞ならその情報は確実だろう、ルシフェル君も最近チャットしてくれないから情報手に入らないし、いつそのこと契約しようかな…

「あ、ああ、うん、そう言えば契約しようかなあなんて思ってたんですよ、はい」

「あやや、ちよろあまですね」

「え?」

「いえいえ! ささっこの契約書にささっ」と書きちゃってください!
!」

文から渡された紙に目を通して見る

生年月日に性別に興味に性癖に好みのタイプからなんかどうでもいだらってことまでびっしり書かなきゃいけない用紙だ

「これが今流行りの新聞なのか…? いや、なんか爺みたいなこと言うけど最近の流行りは分からねえ…」

「性癖は足… ちょっと足伸ばすの辞めるんで伸ばしても良いですよ」

「くっ……性癖書くのに意味はあるのか!？」

「とかいいつつ用紙にビッシリ書いてますね」

「足、太ももの愛なら負けないんだ」

「……………」

「ごめん、さすがにそんなゴミを見る目は傷付く」

そんなこと言っている間に用紙に書き込みは終わり、用紙を文に渡した

「彼女いない歴〃年齢ですか、予想通り過ぎて詰まらないですね」

「見るからに彼氏いないだろお前」

「あやや!よく分かりましたね、このストーカー野郎」

「決めつけんなよ!？まずは疑えよ!？いやと言つか誰がストーカー野郎だ!」

「来週から新聞を届けます、お楽しみにしてくださいね」

「ああ、うん、マジで帰ってくれないかな……」

「では帰りますね」

あれ?今まで目の前に居たはずなのに聞こえてくるのは後ろから、つまり玄関から聞こえてくる

確かにいま目の前に居たはずなのに

「あるえー?」

ガチャツと言う音と共に玄関が閉まる音が聞こえてくる

「スタンド攻撃?」

て言うかあの編集長、みかん全部食いやがった…

+++++

「いま思えばあれ騙されたんじゃない?」

冷静になって見た、ちよつと友達に「俺ってさあ文文。新聞の契約してなかったんだよねwwwwwwうえwwwうえwww」って言ったんだよ

うん、普通に引かれた

「あのクソ記者めえ……」

「いや私に言われても困るんですが…と言うか普通は騙されませんよ」

「早苗が反抗期だぞ諏訪子」

「私達には反抗しないからいいのさ」

そして何を隠そうか後輩であるこの早苗に引かれたのだ

同じ学校で注目を浴びていた俺【悪い意味で】と注目を同じく浴びていた早苗【いい意味で】は何故かメリー繋がりで仲良くなった

今では早苗の家である神社に泊まったり飯食ったりと中々仲良くさせて貰っている

「相変わらずカズは馬鹿だな」

そしてのほほんと笑うこのロリは早苗の従姉妹らしい諏訪子だ、身体は小さいが早苗より年上とか

まあ可哀想に、需要はあるからいいんじゃないかな、まあ貧乳はステータスとか言うし…

「カズ？その目は気に入らないなあ」

「諏訪子、その小さな身体のどこにゴリラみたいな握力がアアアアアアアアアアアア！？すいませんごめんなさいもう考えませんから離してエエエエエエエエエエエエエツ！？」

「諏訪子様、その辺にしないと部屋が汚れます」

「ああ、ごめんよ早苗」

腕がビクンビクンしてる、あれ？ヤバいんじゃないか？これ、腕が、

すっごい、ビクンビクンしちゃっ…ッ

「それで先輩はここに何しに来たんですか」

ツッコミ無しですか、そうですね

「おいおい友達の家に来たら1つ、遊びにきたに決まってるだろ」

「^k

「就活はどうしたんですか就活は」

「ああ…来年から本気出す」

「大変だ早苗、ニートだよ、写真撮っていい？」

「しょうがないですね、特別ですよ」

キラキラした瞳で諏訪子は早苗を見つめる

そして早苗は無表情で鼻血をスプラッシュしながらシャッターを一
回押した後諏訪子に渡した

なに然り気無く諏訪子一枚納めてるんだ、駄目だこのロリコン…
手遅れだ…

「ニートだ」パシャ

「ニートですよ諏訪子様」パシャ

「…いや…ニートじゃないし…」

「始めてみるよ」パシヤ

「あまり見かけない屑ですからね」パシヤ

「……グスツ……ニートジャナイモン……」

「沢山いたら困るからね」パシヤ

「そうですね」パシヤ

「ヒック…警備員だもん…グスツ……」

「カズが沢山いたら困るからね」パシヤ

「考えられませんね」パシヤ

「ウエエ…ニートジャナイモン…グスツ」

泣かないもん…ニートじゃないから泣かないもん
写真に飽きたのか諏訪子はカメラをテーブルに置いてテレビを見始
めた

「なんなの？新手的虐めなの？ニートの何が悪いの？」

「いや、ニートはもう悪いところしかないですよね」

ですよねー

いや分かってるんだよ、だけど働けないこの辛さを分かって欲しいね

「ウオツホン！……………まあ先輩が路頭に迷うのも見ておけないですし、家なら、まあ…人手不足と言うか…」

取り敢えず寒いんだがこの神社にある炬燵は三角形の形なのだ、早苗と諏訪子とまあ一人昼寝しているので入れないのだ

「諏訪子、炬燵に入らせるよ」

「もう一人くらい働く人が欲しいなあなんで、その、まあ、給料は少ないですけど、まあ住み込みも」

「やだよ、テレビが見れないじゃないか」

「じゃあ膝に乗れよ」

諏訪子を無理矢理膝に乗せて炬燵に入り込む

「住み込みだからって、あれですよ？諏訪子様達の部屋に侵入なんか殺しますよ？ただ、まあ……………我慢できないなら私の部屋に……………」

「むう……………簡単に女性を膝に乗せちゃ駄目だよカズ」

「安心しろ、簡単に乗せないから」

そう言うと諏訪子顔を赤くしながら納得がいかないようにテレビを見始めた

しかし最近はず過ぎだろう、ちょっと可笑しいんじゃないかね

「諏訪子は暖かいな、あれだよな」

「小さい子は体温が高いとかほざいたら潰すよ？」

「すみません」

なんな股間がキュツとした

「あれですよ？決して私が先輩をとかそんなんじゃないですね、諏訪子様達の心配であって」

しかし暇だな、神社と言っても27日とかなら暇なんだな…神奈子は寝てるし、やることがないな

「しかしどうするんだい？就職が決まらなかったらニート？」

「ですからね、1月の初めから住み込みなんですけど手続きとか…」

「まあ就職は最終手段はメリーの使用人…」

「メリーさんの使用人……………？」

なんか知らないけど早苗様がむっちゃ怒ってる…

俺は鈍感じゃないんだ、コイツらのデレが難しいんだ(前書き)

12月24日、早苗の会話を修正しました

俺は鈍感じゃないんだ、コイツらのテレが難しいんだ

「んで、なんでメリーがここにいるのさ？」

「それは私が聞きたいわ、早苗に突然呼ばれたのよ」

神奈子がやっと目覚め、何故か分からんが早苗がメリーを突然呼び出し呼び出して置いて自分は俺を睨みながら飯を作り始めた

うん、改めて意味がわからない

「それで、さつきから諏訪子を膝に座らせているカズはなにか知ってるの？」

「いや、全く……あれ？なんで二人して睨むの？」

何故か神奈子とメリーに呆れたように見られる
分からんが取り敢えず俺が悪いのか？

「カズは決して鈍感じゃないわ、ただ馬鹿なのよ」

「そうだな、カズキは馬鹿だ」

「そうだね、馬鹿だね」

「え？何が？俺が悪いのか？なんなの？友達の家遊びに来たら馬鹿にしかされないんだけど……」

泣きかけてる俺を他所に三人は何故か疲れたように呆れたように溜

め息をついた

メリーなんかどうしようもない目を向けてくる

え？なんなの？

「まあこれなら簡単に奪われなくて安心があるからいいんじゃないかな」

そんな事を呟きながら諏訪子は俺に頂垂れてきた

こう見ると本当に年上なのか疑わしいが身内である早苗が敬語を使うくらいなんだからそうなんだろっな

「まあ私にはどうでもいいけどね」

呟きながら神奈子は炬燵に潜り込んだ

そんな神奈子を見たメリーは一息ついた後同じく炬燵に潜り込んだ

こんな時出来る男なら料理でも作るんだろうが生憎料理なぞ作れないスクランブルエッグくらいなら出来るぜ

「炬燵で暖まってるってこ悪いですが、ご飯出来ましたよ」

ぬくぬくしている中、後ろの部屋から早苗の声が聞こえてくる

何時もなら三人でこの炬燵で飯を食べるのだろうが今は五人、後ろの部屋にあるテーブルじゃなきゃ食べられないのだ

「先輩、ちょっとどいてください」

と早苗はお盆に二人文のご飯を入れ運んできた

「ん？なんで二人？」

「私とメリーさんは此方で食べますので」

とささつとメリーの場所と俺がいた場所に料理を並べてしまった

「え？いや、みんなで向こう…」

「先輩」

「と思わない！ああ！なんか今は三人で食べたい気分だなあー！？」

諏訪子と神奈子の手を掴んで後ろの部屋にヘッドスライディングッ！
そしてとある有名旅館の女将もビックリの音をならさずに扉を素早くかつ丁寧に占める

「こ、この俺が恐怖を感じている…ッ！？…：…ばっ馬鹿なッ！？この和樹が恐怖を感じているのかッ！？」

「伝わりにくいネタはやめて早く食べないと覚めちゃうよ」

「今日の献立はビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグだ、お得だな」

え？ワンダフル流行ってんの？

+++++

「それで何かしら？」

和樹達が騒いでいる部屋を後ろに二人の女性、いや生温い二人の女豹がご飯を黙々とたべていた

「先輩が路頭に迷いそうですね」

「？そうね、さすがに幼馴染みがニートは困るわね」

突然話を始める早苗にメリーは不思議そうに答える
そんなメリーに早苗は笑いながら言った

「もし先輩が路頭に迷うなら先輩は家で雇うんで安心してください」

「ふうん……」

今！二人の女豹は壮絶な心理戦を繰り広げています！暫しお待ちください！！

「……………」

「……………」

凄い心理戦だ……ッ……踏み込む余裕がない……

「……………」

尺稼ぎじゃないですよー！

「……ふうん、でもこんなの言うのもなんだけど給料低いんじゃない？あんな奴でも家なら雇えるわ、むりしなくていいのよ？」

語尾を強調しながらニコツとイイエガオでメリーは言う、そんなメリーに対して早苗はイイエガオで答えた

「……いえいえ！確かに給料と言う事に置いては少ないですけど先輩一人ならなんとかありますのでメリーさんは安心してください！」

つまり給料とか誤魔化せばなんとかなんだよ！いいから黙って先輩をこっちに渡せ！と言葉の後ろに隠れているのはメリーにとって簡単に理解した

「……そうなの！でも和樹は早苗の所は選ぶかしら？あ、別に和樹が早苗を嫌ってるとかじゃないのよ？ただ……友達より幼馴染みにたよるんじゃないかなあって思うの」

つまり貴様の好感度じゃ和樹はなびかねえんだよ、断れるんだから最初から誘わない方が幸せだぜ？と言葉の後ろに隠れているのは早苗にとって簡単に理解した

「ああそうですね、でも！諏訪子様や神奈子様と馴染みの友達と一緒に働くってのは働くことにちよつと怯えてる先輩は楽な仕事場になりますよね？」

つまりこっちは一緒に働くのは先輩にとって中の良い友達しかいない仕事場になるんだぜ？仲良く楽しくを好む先輩はどう考えたってこっちを選ぶに決まってるんだろ」
と言葉の後ろに隠れているのはメリーにとって簡単に理解した

「ふうん…でもその辺は大丈夫よ、和樹を雇ったらまず間違いなく私の護衛みたいな役になるから、幼馴染みと一緒にの仕事場になるのかしら、和樹は友達と幼馴染み、どちらに安心するかしら？」

つまりその辺は抜きねえんだよ牛乳がッ！！いいからさっさと諦めるよタコが
と言葉の後ろに隠れているのは早苗にとって簡単に理解した

「へえ、じゃあ殆ど同じ条件なんですね」

「そうですね、全く…私達に迷惑をかけているのをカズは理解してるのかしらね」

「そうですね、先輩ったら仕方のない男ですから」

「そうですね、全く同感だわ」

そう良いながら二人は笑い合う

決して仲が悪い二人ではないのだ
ただ女性の勝負に友情など無縁なのだ

「クリスマスだってのに先輩は独り身ですし、可哀想ですね」

「そうね、と言うかむしろあの男に惚れる女性が居るわけないわよ」

「それもそうですよね」

惚れている二人の女性は笑い合う
底知れぬオーラを放ちながら

+++++

「酷くない……俺だって頑張ってたよ……俺だってさあ……」

「ああ……うん、カズ、来年は良いことあるよ」

勿論隣の部屋は襖一枚じゃ声など遮れずに会話は全て和樹の耳に入っていた

物語は急速として訳の分からない展開になる

修正済（前書き）

修正済みです

物語は急速として訳の分からない展開になる 修正済

日が落ち始め、赤色の夕暮れに照される自分の部屋をなにも考えずに見ていた

お世辞にも広いとは言えない部屋にテーブルが一つ、そして俺の向かいには幻想的な美しさを放つ幼馴染みに良く似た女性

しかし似ているのは外見だけで

「 貴方の選択肢は2つ」

目の前の女性の声は透き通るように そして脳に叩きつけるようによく聞こえてくる

その声もそっくりで、俺に語りかけてくる

「見捨てるか…見捨てないか」

まるで意味を感じさせない微笑みで俺を見つめて問い掛けてくる

それだけで、似ていると言うだけで、無意味に頷いてしまいそうな自分を止められなかった

答えなんか出せなかったんだ 俺は彼女を救いたいー

なんでこんな状況になってるか、少し落ち着くために思い出してみようか

あれは何日間か前だ、ある女性から突然来た電話から始まった

+++++

『久しぶりね、元気にしてる?』

「なんですか、今夜中の一時ですよ?金は貸せないのでからね?」

『……あなたが私を見ている目がどんなものか分かったわ』

少し怒気を含ませた声にハハッと笑い返す

それもそうだろう、この人の電話は毎回毎回良い思い出がないのだ、出来るなら今すぐ切りたい

「なんですか蓮子さん?無人島にフレッシュウーマンでも探しに行くのなら断ります」

『そう言うのじゃないわよ、安心なさい』

「じゃあ雪男?」

『……まず藤岡○探検隊から離れなさい、今回は違うわよ』

「ああ、じゃあ失われたアトランティスとかですか」

『ぶっ飛ばすわよ』

「すみません冗談です」

トーンが低い声に隙いれず謝る、この人は怒るとメリー並みに怖い、電話の相手は宇佐美蓮子^{ウサミ}始めて会った時に「軽いDQNネーム…?」

と呟いてビール瓶で殴られた
どこのマフィア映画だと、思わず突っ込む前に頭から血がスプラッシュして意識が消えた

あの時は酔っていたとかほざいたがどんな悪酔いだと数時間は説教したい

『ちよつと今から会いたいんだけど会えるかしら？』

「はい？蓮子さん今は東京じゃ？」

『今は京都駅よ、ちよつと急用なの』

「はあ…？あれ？でも来年まで帰ってこないって言ってますんですけど？」

そう言えば後ろからガヤガヤと聞こえてくる、今駅にいるのかなえ？今夜中の一時に駅にいるのか？そんな急用なのか？

『のんびりと休養する暇もなく急用が入ったのよ』

「寒……………」

『駄洒落じゃないわよ！？』

休養してる時に急用、うん、上手くないね、そんな事を話している合間にホームで聞こえる高い音は聞こえなくなった、外に出たらしいやけに急いでるな、息を切らしているのが聞こえてくる

『あぁやっぱりそつち行きバスは終わってるわね』

「タクシーならあるんじゃないですか？」

『お金がないわ』

「ちなみに俺もないですよ」

『安心しなさい、ニートに借りるほど落ちちやいないわ』

ああ、教えたのはまず間違いなくメリーしかいない、教えちゃ駄目な人に真っ先に教えやがった

「しょうがないですね…今から迎えにいきますよ」

『ごめん、ちょっと急いで貰っていいかしら』

なんだ？なんか異様に焦っているのが手に取るように分かる、掴みにくい蓮子さんにしたらかなり珍しい雰囲気はこちらも無意識に構えてしまう

ちよっと可らしいぞ

「…そこまで急ぐんですか？」

『そうね、こんな無駄話してる暇が無いくらいに』

これは、ふざけてる場合じゃない雰囲気だな

俺は立ち上がりバイクの鍵を取りながら寝間着だった服を脱ぎ捨てる、無造作にかけてあった黒いシャツとジャージのズボンを着込む

「一時間くらいで行きます」

『ありがとう…急いで欲しいけど事故らないでね』

「分かっています、切りますよ」

相手の返事も聞かずに携帯を置く、ダウンを着込み部屋の戸締まりを確認せずに飛び出る

「たく…」

絶対にただ事じゃない、蓮子さんが狼狽えているのはメリーならいざ知られず、高校からの付き合いである俺は見たことがない

あの人からかかってくる電話はいつも平和じゃないんだ…いつも怪我をした記憶しか残ってない、たまには愛でも囁いて貰ってもバチは当たらないよな？

「雪降つとるし…そういやメリーが今日は降るって言ってたな」

急いで玄関を閉めて階段をかけおろる、さすがに雪が降る寒空に女性を待たせるのは男としてどうかと

今更ながら12階なのにエレベーターがないとは製作者は馬鹿なのではないのか

一階に降りた先に駐車場に置いてあるバイクに向かう、シートを取り上げるとそこに現れたのは無骨な黒のデザインにカスタマイズされた車体

エンジンは特注品と言う有り得ないくらい金がかかった中型バイク

まあ、これはメリー繋がりで破格の値段で…

「んなこと思ってる場合じゃねえな」

シートを丸めて端に投げると鍵を差し込みエンジンをかけた夜中には迷惑なエンジン音が響く

近所の“就寝中”の皆様！！“就活中”の私目が迷惑をかけて申し訳ありません！！（ゝ・ゝ）（テヘペロ

「……いや……伝わりにくい上に駄洒落になってないな……」

アホやってないでさっさと行こう

アクセルを握った瞬間にまた携帯がなり始める
今から行こうと言っのに…

一回エンジンを切ったあと携帯を開くと蓮子さんと画面に表示された

「なん…」

『ひよわあああああああああッ！？』

一瞬だけあまりの音量に携帯を耳から離し思わず携帯を離してしまっ
う、すかさずキャッチしようとして手で二三回ワタワタしてしまう

『か、和樹！？一時間と言わず今すぐ来てええ！？』

「れ、蓮子さん！？どうしたんですか！？」

今まで聞いたことがない悲鳴に急いで携帯を耳に当て聞き返す、携帯からは男性の怒声が聞こえてくる

『大ピンチ！！追い付かれたのよ！？私に戦う能力はないのよ！！』

「ちよっ！蓮子さん！？落ち着いてッ！！今どこに…」

『ひゃあ！？ちよっ…ッ…放しなさいよッ！！』

突然ドサツと音が聞こえてくる、そして携帯からは何かを落としたような大きめの音が聞こえてくる

『携帯落とした！！集合場所は…二人の思い出…よ！』

遠くから携帯越しに蓮子さんの声が聞こえる、そのあと何人かの足音が聞こえてきた後、携帯からは無音しか聞こえてこない

ヤバい、これは何か知らんがかなりヤバいぞ

「蓮子さん！おい！？蓮子さん！？だあッ！！もっッ！！なんであの人はいつも！」

急いでエンジンをかけてアクセルを思いっきり捻る、この際信号とかスピードとか守ってる余裕は無い

「前科とか絶対就活に響くじゃねえか…くだらない理由だったら怒鳴ってやるからなアッ！」

+++++

雪の降る寒空に女性息切れの音がやたらと響く

「なんなのよチャイナコスプレ変態女っ!？」

「なっ!?!なあッ!?!この服装は中国でれっきとした私服です!」

「何時の時代よッ!?!日本語ペラペラな癖に中国気取り!?!誤魔化し下手くそすぎでしょ!?!」

人気の無い夜の道、大通りだと言うのに人一人いない、不気味な雰
囲気を放っている

そしてその暗闇を三人の女性が走っていた

一人は特徴的な帽子を被って肩ぐらいまでのショートヘアの綺麗
な女性 宇佐美蓮子がリュックを背負いながら走っていた

そしてその蓮子を追いかけるようにメイド服を着た女性とチャイナ
ドレスを着た女性が追いかけるように走っていた

「美鈴!もう少し速く走りなさい」

「無理言わないでくださいよ!?!現代ってなんか上手く走れないん
ですよ!妖力も使えないですし!?!なんなんですか現代っ!?!」

蓮子は思う、なんだあの見るからに危ない関わりたくない二人は現
在進行形で私を追いかけている

この構図を知り合いに見られたら最悪だ

「なんか無用にあの女性速くないですか！？明らかに運動不足丸分
かりの女性なはずなのに！」

「五月蠅いわね！？運動不足じゃなくて運動しないだけなのよ！！」

「太った女性が何時でも痩せられるみたいない言い方ね」

「五月蠅いわね！？追い付けないからって嫌味言わないでくれる！
？」

「太ったに反応しましたよ、あれ気にしてますね」

「確かにちょっと気持ちふつくらしてるわね」

このまま止まっつてぶん殴つてやろうかと蓮子は思う、ただあの二人
は見た目に反して有り得ないくらい強いのだ

先ほど駅に偶々居合わせた男性の警察四人を十秒とかららず気絶さ
せてしまったのだ、本当にコスプレで堂々と誘拐をしようとする女
性なのかと疑うくらい綺麗な拳法？だった

しかもあれで本調子ではないと言つのは会話から薄々分かる

つまり自分が行つたらまず間違いなく捕まるのだ

「ハアッ……き、キツイ！！」

こんな事なら普段から運動をしておけば良かったかなんて思う、酒ば

かり飲んでいた性かちよつと体重増えたし…

「疲れが出てるわ、あと少しよ」

確かに厳しくなってきた、息も厳しくなってきたし足もプルプルしてきた、残念ながら私の足は細くて美しく綺麗過ぎるかわりに筋肉などないのだ
プルツンプルの可愛い足なのだ

「き、キツイい！…あ、あの馬鹿はまだなの！？…」

「あの馬鹿？」

「…やばっ！…口は災いの元…ッ」

メイド服の女性が気づいたらしい、それはそうか
我ながら何回も和樹の事を呟いてしまった

いやだつてさ、私だつて女の子だしさ、男の子に助けを求めたつていいじゃない？いいわよね？

「美鈴、多分彼女は助けを呼んだみたいだわ」

「さっきの独り言ですか？そういう能力ですかね？」

「それは分からないけど、彼女の独り言は私達が男達を倒した後ね…つまり」

ば、バレちゃった、と言うか無理！一時間も逃げ続ける体力なんて

私にはないわよ!?

「でも大丈夫そうですよ、彼女はもう走れなくなります」

「な、なんなのあの体力馬鹿達!?!……きつつい…ハアツ…」

初めは数百メートル放れていた距離が段々と近くなって来ている、しかも高速道路なのに車が一切走っていないと言う異常な光景
どこの魔術ですか?

しかも追いかけてきている二人のペースは全く変わらない
どこの幕の内ですか?

「は、走れない…ツ…きつつい!」

もう後ろを向く余裕なんか無い、と言いかすぐ後ろに来て手を伸ばしている

「……い、いやッ……」

触れた、どちらかの手が帽子に触れた

「かず…ハアツ……和樹っ…」

そして次の瞬間、肩を捕まれた

「なあ!?!い、いやア!」

そしてチャイナ娘に羽交い締めにされた
捕まった、完璧に捕まってしまった

「…ッこんの…ふんッ!」

もがいてもびくともしないチャイナ娘の足を思いっきり踏んでみた

「いつ!?! ちょっと痛いです!…くっくっ!」

「ちよっ…ハアツ…微動だにしないって…女性としてどうなの……?
」

「さて少し静かにして貰いますよ」

そう言いながらメイド服の女性は突然どこからともなくナイフを取り出した

「へえ!?! ちょっと、嘘でしょ…?」

「安心してください」

「い、いや…」

ゆっくりと少しづつこちらを歩いてくるメイド女はナイフを手でクルクル回しながら弄ぶ

「か…和樹……」

「あ、あはは……これ完璧に私達患者ですね」

後ろの女は笑う、今の私にはそれも怖くて、なんか周りの暗闇も怖くて、上手く考えられない

「和樹っ……和樹！」

いつもこんな怖い時はあの馬鹿が近くでへらへら笑ってる癖に、今は居ない

自然と私は和樹の名を読んでいた

「この馬鹿……いつも居なくて良い時に居るくせに！」

さっき助けを呼んだのが和樹だからなのか

私が無意識に和樹に助けて貰いたいのがよく分からないけど

「今は凄く怖いよ！速く、速く来なさいよクソニート！」

メイド女がナイフを構えた時とつさに目をつぶってしまった、ああなんか、最後に凄く恥ずかしいこと叫んじゃったわね、なんてお気楽に思ってしまった

「…あ、あれ？」

刺されるって意外と痛くないのか？なんて我ながらかなりお気楽に思いながら目を開けた

まず最初に写るのはメイド女の後ろ姿だった、よく見れば私を拘束しているチャイナ娘もこちらではなく前を睨んでいたのを見ていた視線を前に向けるとそこには待ち兼ねた私のボディガードが立っていた

「か、和樹！！！」

私がつい名前を呼ぶとメイド女は和樹に向かって一歩間を積めた

「あなたが援軍かしら？」

「ああ、援軍だな……いやな？途中から信号が壊れたみたいになってないんだよ、さらには高速道路に車が一台も走ってない、さらにさらに入り口に人が一人もいないんだよ、だからゲート壊しちゃった……いや不思議だらけでな、感覚が狂いそうだった」

「あらそう？それは大変ね」

「これ全部あんたらがやった、なんて言ったら非日常なんて案外近くにあるんだなって素直に感じるよ、ある意味…難しい本に書いてあることより厨二くさい本の方が正しいのかもな？」

「お気楽ね」

そう言いながらメイド女は無表情で和樹を睨んでいた、かく言う私も今の和樹から目を離せないでいる

私の目に写るのは無造作に転がったバイクと今まで見たことの無いような表情を浮かべた友達がフルフェイスを取りながら立っていた

「一ついいかな？」

「なにかしら？」

フルフェイスを地面に投げつけてうつつ向いていた顔をあげた、その雰囲気、異様な感覚を感じて

「か、和……樹？」

その表情は、見て分かった

「そのナイフで何するつもりだったんだ？」

あれは完璧にブチギレてる和樹だ……

和樹の実力（前書き）

この話は夜に修正します

修正後は話が大きく変わるため今読むのはお勧めしません

和樹の実力

状況は最悪だ

「美鈴、そのまま下がりなさい」

「ちよつ、ちよつと！」

蓮子さんは抵抗しているが、あれは無理だろう

なんせ良い太ももだ、力強い良い太ももだ

あれは蓮子さんじゃ抗えない太ももだ

いや、なんかエロく言っているみたいだがそんなことはなくて上手い具合に鍛えられたあの足を見れば結構鍛えられているのは分かる、恐らくだが何かの武術をやっているのだろう

前に出てるメイド女……メイド？

いや………なんでメイド？あれ？………なんでチャイナ？よく考えたら可笑しくないか？

いや、しかし向こうから感じる敵意は本物だ、冗談なんかじゃないのはこの雰囲気から答えている

しかし綺麗な太ももだ

あ、これはちよつとエロく言った

「来ないの？」

「……………五月蠅い」

「…そう」

メイド女はナイフを逆手に持ち大きく後ろに構え、何も持っていない左手を此方に向けた

身体を真横に向け、ナイフを俺からは見えない位置に移動させる

待ちの構え

見て分かった、向こうは此方が来るのを待ち一撃必殺を御見舞いする形

此方に合わせて右手、体を反らせるー いや、もしかしたら彼女ならナイフを即座に出せるのか？

どちらにしる半端な腕前じゃない…

「クソツ…やっぱりただの女性じゃねえよな…」

迂闊に飛び込めば右手のナイフを突き立てられる、此方が一撃入れども間違いなく刺されるビジョンしか浮かばない

どうする？

自分に問い掛けるが答えはでない

ジリ貧だ

+++++

side変更

「……、やっぱりだだの男性のではないわね……」

それもそうかと咲夜は改めて思う、今この場は八雲紫によって一時的に現代から“切られている”

あのスキマ妖怪が自ら入れないとこの場所には来られないはずだ
つまりだ…彼がここに來れた理由は2つ考えられる

一つ目は八雲紫が望んでこの場に呼び込んだ

2つ目はもつとも確実性がある理由だ、彼が八雲紫の能力を受け付けない能力がある

だがただの人間が境界を無視できる何らかの能力を持てるのか？有り得ない話ではない、何せ自分は“時間を操る程度の能力”を持ち合わせている

これは人間には過ぎたる力だ、それを人間である私が持っているのだ、自分と言う確実な例が存在するならば、この考えは間違いない可能性がある

どちらにせよ八雲紫にどんな理由で有ろうと干渉した彼は間違いない普通じゃない

「埒があかねえな？」

間合いをギリギリと積めてくる彼が突然口を開いた
来る

彼は足を肩幅に開き両手を前に突きだして腰を小さく落とした
端から見れば可笑しな構えだ、両手全く同じ位置に構えている

「……そうね、お互い見つめあってるだけなんて詰まらないわ」

「そっかい……んじゃ、行くぜ？」

「ええ、来なさい」

後一步踏み出せば私の間合い、彼はそれが分かっているように……その
一步で止まった

どうくる？

構えからは想像出来ない

接近戦はあまり得意ではないのだ、しかも私の能力は現代では使えない
ない――

時間を止める世界が広すぎるのだ、幻想卿とは広さが違いすぎる、
私の力ではこの世界の時間は止められない――

つまり、不得意な接近戦で闘わないとならない――

ギリ貧にはさせない、一撃で終わらせる

+++++

足をバネに変える　折り畳む足を硬いバネとに変える、ギシギシと唸りをあげながらバネは小さくなっていく

そして、完全に折り畳まれたバネを押さえを

外せ

「ゼアツ！」

一気に弾けたバネは身体を持ち上げ相手に向かって弾丸となり相手を殺す

「ハアツ！」

刹那に交わされたやりとりが、彼女に決断を決めさせる、彼女は上半身を大きく反らす　スウエー状態になった顔があった場所に俺の右腕が通りすぎる

避けられた

その隙を彼女は逃さない、この体制から放たれる一撃に重さはない、だが彼女の右手にはサバイバルナイフ：無茶な体制から放たれるナイフの一撃は俺の頬に真っ直ぐ向かってきた

「か、和樹い！？」

そんなの分かっている

必ず来るのは想像出来た、だからこそ俺は避けなかった

「……………っ!？」

短いナイフが頬に食い込む、信じられないように彼女は目を見開き
ナイフの手を止めた！
ニヤリと笑う、コイツは俺が必ず避けると思い込んだ

「見謝ったなア！メイドオ！」

足を…伸びきったバネは力を無くし横に倒れる！

「しまっ…！」

縮肘打激ーシュウカクダゲキー

「遅えよッ！」

起き上がるうとしていた上半身に右肘が突き刺さる、倒れ込む俺の
体重と重力に加え相手をが起き上がってきた為
右肘は確実に溝に入ったまま二人は地面に叩き付けられた

「カッツ…ゴホツ…!？」

大きく息を吐き出すと彼女は大きく噎せる、ナイフは頬から抜け血
を地面に撒き散らせながら転がっていった

「ぐっ…!？」

「残念！マウントだよオツ！」

右肘を軸に上半身を起こし左の拳が顔面に突き刺さった
ビクンと体が一回跳ねた後、糸が切れた人形のようにパタリと動か
なくなった

勝った 勝敗は言うまでもなく相手の異常性を考えなかった彼女の
間違いだ

「咲夜さん！？」

チャイナ女が焦ったように叫ぶ、蓮子さんを突き飛ばすように放し
ながら此方に走ってくる

そのスピードは走るに該当するようなスピードではなかった、百メ
ートルは離れていた距離がチャイナ女は ……すでに目の前に居た

「ツアアアアアツ！！」

「ガアツ！？」

僅かに飛び上がったチャイナ女は此方が理解出来るスピードで
動いていなかった

大きく身体を捻らせての回り蹴り ソバットが胸に突き刺さった

「和樹！？」

それは飛んでもない衝撃で地面に一切触れずにぶっ飛ばされ三メー
トルは後ろにあったガードレールに背中を叩き付けられた

「かはッ……!?!」

今度は此方が大きく息を吐き出しながら地面に倒れ込んだ

「か、和樹!?!」

横から蓮子さんが滑るように横に駆け付けた

「ちよつと和樹!?!しつかりしなさいッ!」

だが、あまりにも強すぎた蹴りなのか、痛みが無く息が上手く出来ない上に目の前がボヤける

口は鉄の味が染み渡り下がヒリヒリと傷んだ

耳だけがハッキリとし、チャイナ女らしき声と蓮子の叫ぶ声が透き通って聞こえた

「有り……得ねえだろ……ッ……」

見間違いか、どうかは判断出来ないが俺の目は虹色に妨げられた

比喩なんかじゃない

確かに虹色の光が彼女の身体に纏うように光っていた

「和樹!?!和樹!?!」

「聞こえて……ますよ……ッ」

視界がクリアになっていく、痺れたように動かなかった手足の感覚が僅かに戻っていくのが感じた

いま俺は何秒倒れていた？

「ぐのおっ……」

「ちよつと！たてるの！？」

涙目になってしている蓮子さんを横目に俺はガードレールを支えにして
身体を起こした
全く脚に力が入らないのを無理矢理立ち上がりチャイナ女を睨む

「…あ…り？」

居なかった、いやそれより可笑しいのは

車が二台 目の前を横切った

「な、なんだよこれ？」

「……」

横にいる蓮子さんも驚きを隠せないのか、俺の腕をとり支えになっ
てくれながら周りをみていた

ついさっきまで殴って気絶させたメイド女も俺をぶっ飛ばしたチャ
イナ女も 消えた

今までの静寂など無く、人が活動している騒音が小さく聴こえてきた

訳が分からない

「痛つ　　ッッ！アアッ！？」

突然頬から有り得ない痛みが突き刺さる、反射的に離れようとするが脚に力がいらなくてそのまま倒れるようにガードレールにもたれ掛かった

「取り合えず、その傷塞がないと」

「は、はあ？」

よく見れば蓮子さんがピンクのハンカチを頬に当てていた

ああ、そう言えばナイフ刺さったんだ…

「痛い！？蓮子さん痛いよ！？」

「はいはいワロスワロス」

「痛い痛い痛いっ！？グイグイ押すなよ！？ナイフ刺さったんだぞ！？」

「はいはいワロスワロス」

取り合えず色々考える前にこの傷をなんとかしないと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6880z/>

東方想讓心

2011年12月29日02時47分発行